

50. 火と死、あるいは再生

医事万華鏡

季節は春。春を表

す暦の中に、立春や春分

がありますが、立春は春の始ま

り、春分は昼と夜の長さが同じ日

で、いずれも冬の深い眠りから目覚

め、新たな始まりを迎える春を祝う日です。

春を祝う行事は世界各地にあります。代表的なもの

に「復活祭」があります。復活祭は、キリストが十字架に

かけられてから3日後に復活したことを祝う行事で、「春分

の日の後の最初の満月から数えて次の日曜日」と決められ

ています。日本の春分はお彼岸の日としてご先祖を偲ぶ日

ですが、春そのものが、死者の蘇り^レを含意するため、や

はり再生・復活の概念とは切り離せないものです。

ところで、「死と再生」と言えば、寿命を迎えると、燃え

上がる炎に自ら飛び込み、死んで再びその灰から蘇るとさ

れる伝説上の存在フェニックス（不死鳥）の存在が想起さ

れます。フェニックスはもちろん人間の想像の産物ではあ

りますが、人類が火に「死と再生」を仮託したのはなぜでし

うか。人間にとって火とは一体何でしょうか。

有史以来、人は火と共に歴史を紡いできました

た。それゆえ人の^レ火への想い^レとは、^{プリミティブ}原始的

な感性^レとでも言えるでしょう。ある時は危険

な火を管理する術を身に着け、またある時は火

によって心身を癒してきました。内省するとき

も人を祝うときも、蠟燭に火を灯してきました。近頃、現代

風に言えば「キャンドル」の需要が増えていると聞きますが、

その理由には、こうした人間の本能や、原始的な感性への揺

り戻しがあるのかもしれませんが。

事実、そんな火の癒し効果には科学的な裏付けもあるよう

で、キャンドルの焰のオレンジ色は、リラックス効果に関与

する副交感神経を刺激する働きがあると言われています。ま

た、心臓の音や波の音といった、いわゆる「1/fゆらぎ」

という自然界に存在する不規則なリズムを感じると人は心地

良い気分になると言われることから、「1/fゆらぎ」に

当てはまるキャンドルの焰の不規則な揺れを眺めることで、

気持ちが安定するとも考えられています。

さて、イギリスの著名な科学者M・ファラデーは、後にそ

の内容が『ロウソクの科学』として書籍化されることになる

少年少女向けの「クリスマス講演」にて、「この宇宙を遍く

支配する諸々の法則のうちで、ロウソクが見せてくれる現象

に関わりをもたないものは一つもない」と語っています。

蠟燭に火を灯せば見えてくる^レ深遠な宇宙^レ。死と再生を

象意するこの春に、蠟燭の焰によって内面を照らし、自己と

向き合うのも一興かもしれません。（JMS主幹・野村元久）

